

第 158 号

発行 安住寺 (年4回発行)
 臨濟宗南禅寺派
 大分県杵築市大字南杵築379
 〒873-0002 TEL0978-62-2680
 URL <http://www.anjyuuji.net>
 編集 矢野明玄 2・3頁
 矢野玄德 1・4頁

安住寺だより



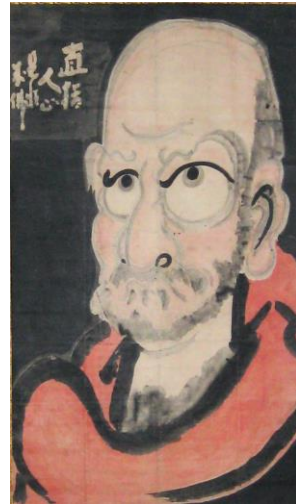
禅の心

白隠禅師没後250年忌

衆生本来仏なり

しゅじょうほんらいほとけ

本年は、臨濟宗中興の祖と仰がれる、白隠禅師の二五〇年忌正當の年になります。(一七六八年没) 十二世紀の末、栄西が臨濟宗を我が国に初めて伝えました。この宗旨をはつきりと特徴づけたのが白隠禅師です。



白隠筆の達磨図・萬寿寺蔵

無縁供養 説教会

23日 午後一時 卒塔婆供養
 (日) 午後二時頃 説教
 24日 午前十一時 合掌会総会
 (月) 午後一時 卒塔婆供養
 午後二時頃 説教
 午後三時半 総供養施餓鬼
 布教師 三重県鈴鹿市 龍光寺前住職

衣斐弘行師

卒塔婆供養料、一本五百円です。出来るだけ事前の申込をお願いします。

「衆生本来仏なり」で始まる

坐禅和讃は、『坐禅』とありますが「禅」への導入の教えを説いています。『衆生』とは、迷い悩む人間のことで「迷える凡夫は、生まれながらに仏である」と分かりやすく説いています。ただ「生まれながらの仏」だと言っても自覚も無ければ、誰も認めないようではまだまだです。坐禅修行によつて『摩訶衍の禅定』をはつきりと体得することから始めなさい。更に「六波羅蜜」の善行を積むことによつて「仏を自覚」し、「無相・無念」の行動そのものが「蓮華国」に生きる「仏」であると教えてくれています。他のお経も大切ですが、『坐禅和讃』や『菩提和讃』を朝な夕なにお唱えする

東日本大震災から丸六年経ちました。七回忌を迎えたことになりました。未だに仮設住宅で、先の見えない生活をされています。行方不明の方も二五五七名(本年三月十日現在)おられます。除染は進んだと言っていますが、原発はこれからです。熊本の復興もまだまだこれからです。今後とも出来る支援を続けますのでご協力下さい。

28年度 後期義援金のお知らせ

東日本大震災義援金 40,000円
 (累計 1,043,708円)

熊本大地震義援金 42,480円
 (累計 142,480円)

今回の82,480円は、全額お賽銭です。

これまでの義援金総合計
1,186,188円
 (内 お賽銭 709,621円)

仏とて外に求むる心こそ
 迷いの中の迷いなりける

一休禅師

ことをお勧めします。元気で若い内に坐禅体験をして「仏」を探してみして下さい。古来より、「一寸坐れば一寸の仏、一日坐れば一日の仏」と言っています。



安住寺の桜 今年の満開は何日かナ

「禅・今を生きる」

白隠禅師二百五十年

遠諱にあたり③

「白隠禅師坐禅和讃の教え」

月のきれいな夜、外出先から帰る時のこと、長男が「お父さん知っちゃうる？月の光が何処から来るか」と尋ねてきた。「太陽の光が月に反射してくる」と答えると、「じゃあ、太陽の光が月に反射して地球に来るまで、どれ位かかるか知っちゃうる？」と。「・・・」な私に「8分ちよつとかかるんで」と最近の授業で教わったのか、教えてくれた。最後に「凄いなあ。なんか有難いなあ」と。子供には、大人が忘れた豊かな感受性がある。



さて、法事や月例坐禅会でもお唱えする『白隠禅師坐禅和讃』は衆生本来佛なりではじま

るが、その一節に「四智円明の月さえん」とある。この一節の前後を改めて読んでいただきたい。

無相の相を相として

行くも帰るも余所ならず

無念の念を念として

謡うも舞うも法の声

三昧無碍の空ひろく

四智円明の月さえん

此の時何をか求むべき

寂滅現前するゆえに

当所即ち蓮華国

此の身即ち佛なり

意訳

目に見える形や姿は本来の姿ではない。諸行無常であり、無相である。そのことを自覚すれば

煩惱や執着から離れ、欲望を捨て去ることが出来る。どこに居ようとどんな状況にあらうと、心穏やかに安心を得ることが出来る。

次に心で感じる一念一念に、良いことだ、悪いことだととらわれず、雑念の無い清浄な心で、無念を保っていけば、見るもの聞くもの、立ち居振る舞い全てが、仏の教えとなり、仏の姿となる。

そうして、この無相・無念で自由自在、無碍の境地であるなら、澄み渡った空に美しく光り輝く月のように、悟りの智慧である四智が光り輝いてくる。

四智とは

一、大円鏡智(だいえんきょうち)。大きなくもりのない鏡のようにすべての事象をありのままに映し出す智慧。

二、平等性智(びようどうしやうち)。私たちは自我によって物事を差別して見ているが、すべての事象は平等であると知る智慧。
三、妙観察智(みようかんさつち)。すべての事象をありのまま

に、しっかりと観察する智慧。
四、成所作智(じやうしよさち)。観察した状況を把握し、なすべきすべての事をなすとげる智慧。

四智が輝き本質を映し出し、何をなすべきかがはっきりとした境地を得るならば、迷うこともなく、本来そなわっている仏心を他に求める必要もなく、悩み苦しみは消滅し、今こゝこの瞬間」の日常そのままが正に浄土であり、私たち自身が仏祖と何ら変わることはない尊い仏心をもつ仏なのであります。

坐禅和讃では、このように衆生本来仏なりと「悟り」の世界を表しています。

さて、先日ある檀家の方々に『教えて、お坊さん！「さとり」ってなんですか』という本をお借りした。臨済宗をはじめ浄土真宗、天台宗などの僧侶の方々が、「悟り」の世界をそれぞれ体験や教義を踏まえて説かれていた。

その中で臨済宗円覚寺派の

管長、横田南嶺老師が禅の「無事」について書かれていた。

臨濟禪師という人は、「無事とは、求める心がおさまったときである」と、こう言うんですね。でも、まだ求めていない人に求めなくていいって言ったって、まったく無意味なわけですよ。

臨濟さんは、求めて求めて求め抜いたところを前提にして、求めることは無い、と言った。だから最初はやっぱり求めなきゃいけません。

横田老師の言われる「無事」も、白隠禪師の「衆生本来佛なり」の世界も、求めて求めて、しっかり仏道修行し、坐禅をしなければたどり得ない境地かもしれません。

しかし、その修行をするというところが、一般的な日常生活では難しく、どうも仏教や禅が遠いものと思われがちなのかもしれません。ところで、白隠禪師は公案

(禅問答)を体系化し修行方法を確立された方でもあります。

その公案に有名な「隻手(せきしゅ)の音声(おんじょう)」がある。

「両掌相打って音声あり、隻手に何の音声かある(両手を打ち合わせる)と音がするが、では片手ではどんな音がするの(か)」という問いかけである。

この非合理的な問いによって、修行者を思慮分別を超えた境地へ導くことが、この公案の意図である。

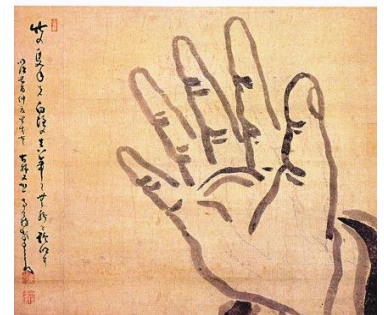
この「隻手の音声」の公案に面白いエピソードがあります。

白隠禪師のお寺の近くに、餅屋をしていた「おさん」というお婆さんがいました。このお婆さんは白隠禪師のお弟子さんであり、「隻手の音を聞いてこい」と公案を頂いたのに対し、

白隠の隻手の声を聞くよりも両手叩いて商いをせよ

と、詠って返したといいます。難しい隻手の声を聞く暇があったら、「いらっしや、いらっしやい」と一生懸命両手叩いて商

売すればいいということですよ。



白隠禪師墨跡《隻手》

久松真一記念館

その詩に対して白隠禪師も詩で返します。

商いが両手叩いてなるならば隻手の声は聞くにおよばず

商売は、儲かっているときもあればそうでない時もある。いい時もあれば悪い時もある。商売にかぎらず、順境逆境の相対的な世界で思い煩うこともあ

るが、どんな境遇であろうと、しっかり地に足のついた商いができれば、「隻手の声」は必要ないと言っているのです。これは各々置かれてある境遇を、良いの悪いの悩み苦しむのではなく、ありのままを受け入れ、精一杯であればいいということではないでしょうか。

日々是好日

●一月五日・南禅寺管長中村文峰管長猊下の米寿のお祝いに随喜させて頂きました。お元氣な様子に弟子一同感謝を新たにしました。●一月十七日大般若祈祷会法要。今年から拙僧の導師で無事お勤めさせて頂きました。尚、二月五日千光寺(八坂)・三月一日龍雲寺(大分市白木)の大般若法要に出頭●二月二十一日南禅寺派部内会・二十二日臨濟宗青年僧の会総会に出席●二月二十八日総代会(於・安住寺)来年度予算等について話し合いを致しました。●三月十五日木付講法要●この春から次男三男がそろって幼稚園に上がります。成長を喜びにしながら日々務めてまいります。●四月八日花まつり、本堂前に花御堂を出してお釈迦様の生誕をお祝いいたします。甘茶の接待もありますのでお出かけください。合掌

近ごろ 家族葬

最近『家族葬』が流行のようにある。昨年、二十四名の葬儀があつたが、内十三名の式を任職一人で務めている。勿論喪主よりの申し出である。その内、何軒かは「家族葬」だつたようです。

そもそも、葬儀は家族近親者が集まり、故人を偲び儀式をして葬る。そこに故人や喪主、家族との繋がりの深い人々が集まり、故人との別れを惜しむ。加えて残された家族を支え励ますのが、古来からの葬儀の形式であつたように思う。

いつの頃からかは明確にできないが、葬儀がいわゆる派手になり、加えて「葬祭場」も出て、多数の参列者が式場に入るようにもなつた。付き合ひの濃淡もありながら、故人を全く知らないのに、式に参列することもあつたのではなからうか。それに伴ひ、香典はあるものの費用はかさみ、当然その分手間もかかり、家族は故人を偲ぶことも出来ず、只々終わつてみれば疲労困憊の葬儀でしかなかつた。これが、家族だけでひっそりと

葬儀をしようとする人が増えた一因ではないかと、勝手な分析をしているところです。



初期の頃は白木仏具の祭壇が主流でしたが、この頃は生花飾りが最も一般的のようです。

ただひたすらに故人の

安寧を祈りご厚誼に感謝

もう一つ穿つた見方をする。家族葬が増えたのには、地域の繋がりが希薄になつたことも要因の一つでしょう。他人の世話にならなくても、否、なりたくないの、そつと葬祭場で済ませてしまいたい人が増えたのではなからうか。もう一つ、家族や子供が少くない。親戚が少ないか、あつても高齢・遠方なので家族だけで済ませるといふのも理由に挙げられるのではなから

うかと想像できる。

各家庭にそれぞれ事情があり、一長一短もあるのでよし悪しは軽々には言えません。ただ故人にとつては初めて最後の儀式であります。見方によつては、半分は喪主・遺族の葬儀であるとも言えるので、後悔しないように熟慮をして、事に臨むべきさだとは思いません。

三月の下旬、身内に不幸があり葬儀に参列した。喪主は家族葬を選択し、近くの小さな会館を依頼して葬儀を出した。それなりの付き合ひがあつたとみえて、部屋に入れなかつた会葬者があつた。感激しつゝ葬儀を終えたのだが、一週間経つても毎日のように、一人二人と弔問の来客が有つたと言う。役所にも行けず、片付けも出来ない、溜息をついていた。やつぱり普心（うづしん）に知らせて葬儀をすれば良かったと反省していた。

『村八分』という言葉がある。村の秩序を破つた者に制裁として交際を断つこと。いわゆるいじめだが、それでも火事と葬儀だけは、同じ村民として手助けをするという風習です。

葬儀が村の秩序ではないが、

喪主（家）自らが会葬は結構です。という態度がその後の日常生活地域の中での活動や居場所に変化が無ければ良いかと案ずるのは、余計な心配でしょうか。

あつちもこつちもの例が習慣となり、隣近所が困つていても知らんふり「余計な手出しは迷惑」が当たり前になつてしまうと、更に地域の繋がりが希薄になり、生きにくい地域になつてしまうのでは、危惧の念がつのるばかりです。やつぱり、余計な心配は無用ですかナ。（閑栖記）

◇行事予定◇

- 四月八日・早朝 坐禅会
- 四月八日・降誕会（花祭り）
- 午後二時花祭り講演会（城下町会館）
- 四月八日・独秀流御詠歌
- 四月十八日・ご詠歌・観音講
- 四月二十日・写経写仏の会
- 四月二十三日・説教会
- 四月二十四日・合掌会 総会
- 五月二十八日・決算報告会
- 御詠歌Ⅱ 五月以降は本堂に掲示
- 坐禅会Ⅱ 第二・第四土曜
- 四月より朝六時から
- 写経の会Ⅱ 五月 22日 六月 20日
- 都合により変更することがあります。